●司会（山本一巳）— それでは再開させていただきます。第２部では、先ほど報告をいただきました研究会の主査に加えまして、各研究会から一人ずつ、ディスカッサントとして登場していただきます。

そして、時間の配分ですが、時間が 100 分あります。セッションが５つありますので、各研究会 20 分です。各ディスカッサントには５、６分ぐらい発表していただきまして、そのあと、フロアを交えて質疑応答にしていただきたいと思います。

それでは最初に、方法論から香港中文大学の金観涛先生にお願いします。

◆「中国学と現代中国学構築」研究会

●金観涛— 我对加加美教授的这个报告作一个简短的评论。我认为爱知大学进行的这一个现代中国学的课题里面最有特色的是它设了方法论的小组跟推行一个新的方法论的研究。它的目的是想超越我们现在普遍在使用的研究者跟研究对象的分离、教学跟研究的分离、各门学科专业之间的分离、现在跟历史的分离造成的方法的局限，而推行一个新的研究综合性的、学科交叉的、主客体交融的、教学跟研究连在一起的一个研究方法。而且我认为四年多来，这个方法是取得成效的，给我印象最深刻的是他们在研究过程中间设立了双博士的学位，在爱知大学、中国人民大学跟南开大学三地同时培养双博士，而且教的课程之间尽可能实现研究跟教学的结合，以及各门学科的这样的一个结合。其中我深有感触的是把这个历史的视野引到当前全球化的中国学研究中的重要的地位来，今天经济学、法律、政治的强项，文化、历史越来越处于边缘地位，很多人甚至忘记了它的存在，结果使得很多问题变成不可理解的。就拿我上午听那个 Phil Deans 博士他的综合报告而言，这是一个非常精彩的、很简短、很深入的描绘当前中日关系、政治经济文化之间的报告。我很有启发，但是不知道各位注意到没有，报告者在讲到中日两国民族主义的时候都经常用一个词，就是“不合理的、不可以理解的”这样的词。他还经常提到为什么中国和日本的民族主义不能做到象欧洲大国之间那样通过一个更好的了解而消除呢？为什么会有那样的问题发生呢？这是一个很困惑的问题，其实这个问题的本身的存在就说明了，中日两国近代的民族主义跟欧洲是不一样的。我们如果以欧洲的模式来套，我们就会遇到刚才 Phil Deans 博士的情况，认为它是不合理的。我本人也是一个反对民族主义的，也是希望超越民族主义的，但是我们只有真正了解中日民族主义跟近代西方民族主义的不一样，我们才能超越它，才能理解它。而这个不一样恰恰跟中日，就是东亚本身的现代化道路是有关系的。我想，随着中国的崛起，中国本身的现代化在现代经济的发展、在全球的比重越来越大，我们会越来越感到东亚问题的特殊性。一般来说，我们经常把现代化看为一个现代化后进国家比如说日本、中国、韩国、东亚向西方学习的过程，这固然是不错，但是对东亚来讲，有一点是很特殊的，就是东亚本身的文化，东亚本身的儒学，它的在前现代的发展跟二十世纪去学习西方制度提供了很多资源，这些东西是东亚特有的。因此我想只有引进新的方法特别是新的视野，多学科交叉的视野，特别是历史的视野，或者用加加美教授讲的纵的横的视野，我们才可以研究，有新的进展。当然目前为止我认为，这四年半来，这方面取得了很多成果，但是离开我们要达到的目标还是非常之远的，应该说刚刚起步，所以我想如果ＣＯＥ这个计划要继续下去的话，方法论这个东西我希望能够得到保持。谢谢！

●司会— それでは、この方法論をめぐって、フロアあるいはこちらのほうからご意見、質問がある方は出していただきたいと思います。どなたかご意見のある方。どうぞ。

●鄒驥— 感谢主席，我是中国人民大学环境学院的邹骥。那么确实刚才诚如金教授所说，我也对

这个ＣＯＥ项目里边这个方法学的研究感到印象很深刻，但是我在思考这样一个问题，就是因为毕竟我们这个ＣＯＥ的项目还是以社会科学和人文科学为主导的，那么在这个时候我们在思考什么呢？就是我们传统的社会科学和人文学科的这个方法学和我们新构造的这个方法学之间是一个什么样的关系，它们是怎么集成的，然后怎么构成了这个专门的中国学研究的方法学的要素，然后它的这个结构是什么，比如说和我们传统的经济学的研究方法、法律的研究方法、社会学的研究方法，我们历史学的治学的方法，那么这些方法，它怎么让人看到一个更清晰的途径，就是它有它这个传统的、历史的这种来源，然后它又针对一个专门的现代中国学的研究又有一个新的结构或者一些新的进展，那么我想就这样的一些问题想请加加美教授、请其他的教授能够给我们一个更清晰的描绘，谢谢！

●加々美光行—　日本語でお話しします。社会科学・人文科学は、自然科学と異なって、研究対象となるものが人文的、あるいは社会的現象です。したがって、そこには対象自身が意思を持つという特徴があります。

対象の意思が研究者、研究主体の側に、対象側から研究者に影響を及ぼすという、一種の双方向、単純に研究者が研究対象に働きかけるという一方向的な方法は取れません。必ず双方向的な働きをするわけです。

かつて植民地統治（帝国主義）時代に、例えば日本の満鉄調査部とか、東亜研究所とかの国策研究機関がおこなっていた調査研究の場合には、研究対象である中国の東北地域の社会、あるいは中国の華北地域の社会というものに直接研究者が手を加えることができました。

例えば、現状の改革をおこなう、改造をおこなうといったようなことが可能になるわけです。これは前提としては、一方向的に改革をおこなう、改造をおこなうというやり方です。植民地統治自体の行政が研究調査と密接に結びついていたわけです。

しかし、そのこと自体が正しい方法とは言えません。つまり、植民地統治という歪んだ構造を持っているわけですから、植民地統治が克服されたあとには、そのような条件は消えていくわけです。つまり、日本人、欧米人が勝手に中国社会を改革したり、改造したりすることはできなくなる。改革・改造をするのは、あくまで中国人自身であるということになってくるわけです。にもかかわらず、欧米日本の学者の研究の方向性としては、依然あたかも中国に改革を加えることができるかのような意識の下で問題設定がおこなわれるということがあります。

ですから、主観的意図としては、中国を変えてやろうとか、あるいは中国に影響を何らかのかたちで及ぼして、例えば、中国社会を民主化するというようなことを、どこかに想定をするという傾向が生まれてきます。しかし、対象に意思があるという人文科学・社会科学の特徴からいけば、それは双方向でなければいけないわけです。

それともう１つ大きいのは、自然科学の実証性について言えば、対象となる自然現象が研究主体のほうにリアクション、つまりある意味での反応、強い反発とか、「そんなことをしてくれるな」とか、「そんな自然改造をわれわれは受けたくない」といったかたちで、自然が人間に反応を起こすということは、研究室、実験室のなかでは起こり得ません。しかし、実験室の外では起こり得ます。

ですから、研究室で示される実証性は、一方向的な作用によって仮説が実証されてくるわけです。実験室のなかで研究対象が操作を加えられてある変化を起こします。そうすると、変化はわれわれが仮説で予想した、考えたとおりの変化であるとして実証が成り立つわけです。

ところが、社会科学はそうはいきません。一般には、相手が常時、こちらに意思を持って働き

かけてきます。まして中国の場合は、中国社会を勝手に改造するとか、改革するということは、外国人には本来許されないことです。

そうすると、実証過程が自然科学のようには取れないわけです。取れないから、逆にいえば、勝手なことが言えるのです。自分の仮説が実証されなくても中国を分析するということが一応可能になるものですから、そこに地域研究の最大の問題があるのです。

実は、私は常に双方向の方法論をそこに確立しなければいけないということを申しました。その双方向には、実は先ほど言いました「縦糸」「横糸」、つまり時間と空間の関係から生まれてくる方法論も非常に深くかかわっています。

つまり、一定の意思を持って中国社会を変えていこうという改革の意図は、内発的に中国人自身が自ら起こすものです。むろん外部から働きかけることもできますが、溝口さんが指摘されたように歴史的に中国自身が内部から自らの道を切り開いていくという縦糸的な方向性があります。それに対して、横糸はウエスタン・インパクト（西洋の衝撃）もそうですが、外から働きかけていくという側面、横糸の問題が出てきます。だから、横糸と縦糸の問題は、先ほどの社会科学の対象が目的意思を持っているということと密接にかかわっています。

そのような複雑な問題を方法的に構築していくために、先ほど２つの問題を取り上げて強調しました。ただ、確かに金観涛先生が言うように、その方法論はまだ始まったばかりであると言えます。

●司会—　はい。この問題は非常に根本的な問題であるわけですが。どうぞ。

●周長城—　我是武汉大学的周长城，我也是方法组的成员。我想说一下就是这个方法小组的设立是非常必要的，也是目前我认为取得一定的成绩，我希望将来以后如果能继续获得资助的话这个方面继续做下去，为什么这么说呢？因为纵观现在这个社会科学的发展，其实很多的突破都是在方法论上面的突破，比方说我们社会学早期注意宏观研究的帕森斯的这种结构功能主义，到后来的 50 年代的加芬达尔他们的民俗方法研究学，这些都是方法论的一种突破，一直到现在的吉丁斯的应当强调就是刚才加加美先生讲的这种研究的主体和研究的互动，比方现在吉丁斯的结构和行为的互动，那么这个方法论的突破，人们得重新来认识这个行为和结构的关系那是完全不一样的，那么这个方法到哪里为止呢？什么样的方法是最科学的呢？这和社会科学的方法也是不一样的，比方说现在我们的社会科学比较注重实证的经验性的研究以及一些定量的一些研究，那么对整个社会科学尤其社会学的这方面的研究的途径发生了很大的变化，我认为这个最终的方法可能很遥远，但是我们探寻的这个过程，就是为我们研究主题或者研究我们的这个社会提供了人们思考的一种框架，人们在这种路径下面去思考、去探寻问题可能比我们不探的这种方法可能要更好，所以从这个意义上来讲，我觉得我们这个方法的研究，在目前的一些中心里面，不管是在我们中国大陆的一些研究中心也好，还是在日本的中心也好，象专门设立方法论的研究还是比较少，所以我觉得加加美先生把这个提到这样的一个高度来研究这个问题确实是非常必要的，我觉得这是把握了整个社会科学发展的一个基本的、将来的路径与基本的途径，这是我的观点。谢谢！

●司会—　はい、どうもありがとうございました。もう時間がほとんどありませんが、加々美さんから最後に今の質問に関連して何か。

●加々美—　今のは質問というより意見といったほうがいいですよね。

●司会—　いいですか。それでは、もうひとかた、ご質問があればどうぞ。

●朱安新—　愛知大学の朱安新です。本当は裏方で質問をしてはいけないと思いますが、やはり質問させていただきたいと思います。加々美先生はお話のなかで、根っこのあるナショナリズム

の形成、ある種の内発性の民意形成についてコミュニティを１つの可能性として求めているとおっしゃっていました。加々美先生は方法論の立場ですが、私は同感で都市社会学で実践的なレベルでやっています。次元が違うので、自分の土台に話を持ってきて不適切かもしれませんが、質問させていただきます。

市場化と行政化が進んでいるなかで、どうしてもマイホーム主義とか、私化という傾向が進んできます。コミュニティの崩壊というような議論が、ある種の常識のように形成されていますが、このような点を考えると、コミュニティに対する希望と、コミュニティ自体が提供する学問のためのバックグラウンドとの間に、少しギャップを感じています。私もこの点についてずっと悩んでいます。ぜひ、お考えをお聞かせいただければと思います。

●加々美—　かつて、1980 年代の末に『渇望』という連続テレビドラマがありました。この『渇望』というドラマは、家庭崩壊を見事に描いた大変長い連続ドラマでした。私は、毎日、テレビの前でくぎ付けになりました。深夜に連続して放送していたものですから、当時、寝不足になるほどでした。それにしても、張玉林さんがどこにおられるかわかりませんが、張玉林さんは南京大学の社会学の先生です。農村コミュニティの研究をされていて、コミュニティがものすごい勢いで崩壊してきているとおっしゃいます。『渇望』は、都市部のコミュニティ、家庭の崩壊を描いたものですが、実はそれはもう農村部の方がより深刻です。農村そのもの自体が崩壊を遂げるという悲惨な結果も招いています。

そうした方向性に対してどのようにネジを巻き返すかというのが問題です。環境の問題も同じです。環境の問題も、やはりコミュニティが崩壊を遂げていけば、解決するための、むしろ人間的基盤、人間的根拠地というものが失われてしまう可能性があります。

なぜかと言うと、例えば、水俣という村で、水俣公害が起きたわけですが、かりに水俣漁民が公害が起きた際、水俣の漁村をみんなが離れて都会に出てしまったとしたら、面倒なことは避けて、どちらでもいいから都会へ出てしまえばいいと考えて水俣を離れたとしたら、決して水俣公害は解決しなかったわけです。

水俣漁民は、自分たちが公害病で死んでいく悲惨な現実を前にしても、水俣漁村を離れないで、こんにちまで公害闘争をやり続けています。

そういう在り方というものを、もう一度中国でも、日本でもつくらなければいけません。問題解決のためには、特にコミュニティから発する政治、コミュニティを守ろうとする意思から生まれてくる政治的ナショナリズムは、それほど強烈な排他性を帯びないと思います。なぜそういえるかについては、時間がないのでお話できませんが、おっしゃるとおりです。

では、具体策を述べよと言われると、現実には農村と都市のコミュニティが崩壊を遂げつつあるという現実しか言えませんが、方法論にかかわってこの現実に着目しなければいけないと言っているのです。方法的な着眼点です。コミュニティを守るという原点に戻るべきだというのが私の主張している点です。

●司会—　はい、どうもありがとうございました。それでは、次の政治のセッションに移らせていただきたいと思います。南開大学の朱光磊先生、お願いします。